

## 第5章 テュルク語定期刊行物における民族名称「ウイグル」の出現と定着

大石 真一郎

### 1. 問題の所在

現在、ウイグルと呼ばれる人々は新疆ウイグル自治区の南部を中心として中国側に約800万人、カザフスタンに20万人ほどで、クルグズスタン、ウズベキスタンやトルコ共和国にも若干数が暮らしている。

1980年代以降、新疆においては、移住による漢族人口の増加や中国政府の対応への不満から、ウイグル人による抗議運動や、さらには独立を求める分離主義運動が活発となっている。85年12月と89年5月には区都ウルムチで大規模なデモが起こり、90年4月にはカシュガル近郊で礼拝を巡るムスリムと当局との対立が反政府武装襲撃にまで拡大した。各地で「東トルキスタン」や「ウイグルスタン」(ともに現在の新疆に相当する領域を差す)の独立とそのためへの聖戦を呼号する蜂起や暴動が散発し、95年にはホタンでイスラーム原理主義の影響を受けているとされる一派によってイスラーム共和国の樹立が標榜された<sup>1</sup>。記憶に新しいところでは、97年2月のクルジャでの暴動や、ウルムチ、北京など大都市での「ウイグル族分離主義者」によるものとされるテロ事件が日本のマスコミでも報じられている。

また、この間、1991年にはウイグル人作家トルグン・アルマスのウイグル語による著書 *Uyghurlar* を巡って当局主導で大規模な批判運動が展開され、著者自身も投獄されるという事件が起こった。その内容が「大ウイグル主義」的であったからといわれる。すなわち、8000年前に「東は興安嶺、西は黒海、北はアルタイ、南はヒマラヤ」の間に「古ウイグル人」が存在し、中央アジアの歴史が要するにウイグルの歴史に他ならない<sup>2</sup>というのである。

今やウイグルという民族名称は、彼らにとって隣人である漢族(漢人)と自己との違いを強調したり、さらには中国からの分離独立を求める民族運動における場合のみならず、確固とした実体を有しているように思われる。しかし、世界中の民族名称の多くがそうであるように、「ウイグル」もまた今世紀になって新たに考案または創造されたものであり、新疆で「ウイグル」が公式に採用されたのは1935年になってのことであった。

「ウイグル」の名称が歴史上初めて現れるのは唐時代の漢籍史料においてである。テュルク系遊牧民のウイグルは、744年に突厥帝国が解体した後、これに代わってモンゴル高原に支配権を確立するが、840年にクルグズ(キルギス)の襲撃を受けて四散し、その主力は東部天山山脈に

<sup>1</sup> 梅村坦『内陸アジア史の展開』(世界史リブレット11) 山川出版社、1997、22-23頁。

<sup>2</sup> 間野英二編『中央アジア史』(アジアの歴史と文化8) 同朋舎、1999、208頁(担当、濱田正美)。

本拠を移して西ウイグル（天山ウイグル）王国を築いた。定住化を進めるとともに仏教を受容し独自の文化を担ったウイグルの政権は、13世紀末頃まで東トルキスタン東部に存続した。その後西からのイスラーム化が進んだ東トルキスタンにおいて「ウイグル」は「仏教徒」と同義に扱われ、16世紀初頭に東トルキスタンから仏教徒がいなくなると、「ウイグル」という名称もまた忘れ去られた<sup>3</sup>。

1921年アルマアタで開催されたソ連在住東トルキスタン出身者の大会において、ロシア人トルコ学者マローフ Сергей Ефимович Малов の発議に基づき、「ウイグル」という名称を復活させて自ら名乗ることが決定された<sup>4</sup>といわれる。ロシア人学者の提案によるものであり、ソ連が後に中央アジアで「民族的境界画定」を行うための準備作業の一つとみなされていることから、この「ウイグル」採用が東トルキスタン出身者たちの自発的な選択であったというよりは、政策上一方的な働きかけによって決められたかのような感を抱かせる。事実、そのようにみる研究者も多い。しかし、果たしてそうであったのか。本報告はこの点を検討したい。

19世紀末からロシアではテュルク諸語で書かれた多くの新聞や雑誌が出版された。そのなかには東トルキスタンに関する記事も少なくない。これらの幾つかは東トルキスタンのテュルク系ムスリム（その多くは現在のウイグル）にも購読されており、1930年代まで自らの定期刊行物を持つことがなかった彼らにとって世界情勢や先進イスラーム地域の動向を間接的に知るほとんど唯一の情報源であった。また、このなかには僅かではあるが彼ら自身の投稿記事も含まれている。

以下、これらの定期刊行物において、東トルキスタンのテュルク系ムスリムがどのように呼ばれていたのかを提示する。そして、1910年代になって「ウイグル」の名称が現れることに注目し、このことがアルマアタでの大会の決定に繋がる可能性を示す。また、1921年以降、ウイグルの名称が定着する上で重要な役割を果たしたと思われる新聞『貧者の声』の概要を紹介したい。

## 2. ロシアのテュルク語定期刊行物における呼称

1921年にアルマアタで「ウイグル」の名称が採用された時、これに該当するのは東トルキスタン出身のテュルク系ムスリム定住民とその子孫であった。しかし、この時にあっても彼らのなかに同一の集団を構成するという意識が存在していたわけではない。そもそも、彼らは大きく分けて二つの集団からなっていた。

---

<sup>3</sup> 濱田正美「モグール・ウルスから新疆へ」『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』（岩波講座世界歴史13）岩波書店、1998年、102-03頁。

<sup>4</sup> 間野、同上、200頁。濱田はこの記述にあたって A. H. Кононов, *История изучения тюркских языков в России. Ленинград, 1972*, стр. 230-231. を参照しており、コノノフは、A. A. Кайдаров, *Язык народов СССР. том 2. Тюркский языки. Москва, 1966*, стр. 363. （報告者未見）に依っている。また「ウイグル」の採用がアルマアタではなく同年タシュケントにおいて決定されたとするものもある。ラティモア著(中国研究所訳)『アジアの焦点』弘文堂、1951年、167頁。

一つはタランチTaranchiと呼ばれていた集団で、羽田明によればその語源はカルムク語のtaran（耕地、種子、穀物）に由来し、「播種人」の謂いとされる<sup>5</sup>。17世紀にジュンガルは東トルキスタン北部のイリ地方を本拠として遊牧国家を築いた。彼らが南部のタリム盆地周辺のアアシス住民をイリに移住させ、農耕に従事させたのがタランチの起源であり、その後、ジュンガルの統治政策を継承した清朝によっても1760年以降幾度かに渡って強制移住が行われた<sup>6</sup>。1864年に東トルキスタン全域で反乱が勃発した時、彼らもイリの清朝勢力にたいして蜂起し政権を樹立した<sup>7</sup>。1871年にはロシアがイリを武力占領し、10年間ほど統治下においたが、1881年のサンクト・ペテルブルグ条約でイリが清朝へ返還されることになると、報復を恐れた多くのタランチはロシア領のセミレチエ州などに移住した。

もう一つはカシュガルリクKāshgharlıqと呼ばれる人々で、「カシュガル人」とか「カシュガル出身者」と訳せよう。ウイグルに限らず、中央アジアのアアシス定住民は今世紀初頭まで自らの民族名称を持たず、単にムスリムであるとか、「カシュガル人」や「トゥルフアン人」のように出身のアアシス名を冠して自称とした。カシュガル人は比較的新しくロシア領に移住し、そのほとんどは商業に従事していた。

一方、中国側でも1935年に「ウイグル」が採用されるが、その対象はカシュガルを含むタリム盆地周辺のアアシス住民であり、イリ地方のタランチは含まれていなかった。中国側でタランチをウイグルとみなすようになるのは1945年の解放後のことである。

「ウイグル」の名称が現れる前に彼らがどのように呼ばれていたか、または自称していたかという問題にはすでに回答を示したようなものであるが、このタランチやカシュガル人にあたる呼称が定期刊行物のなかに現れる例を示しておこう。

ロシアの統治下にあったイスラーム地域でテュルク語によって最初に出版された定期刊行物は、トルキスタン総督府のロシア語機関誌の付録として1870年に発行されはじめた『トルキスタン地方新聞』である。そのなかで、カシュガル人にあたる用語は、「カシュガルの民」Kāshghar ahli、「カシュガル地方の人々」K. vilāyetlerining ādamları、「カシュガルの人々」K. khalqları / K. ādamları、「カシュガル人」など幾つかのバリエーションがある<sup>8</sup>。報告者が見た限りでは「カシュガルのムスリム」という表現がないのは、カシュガルはムスリムの町であるという認識があったからであろう。

つぎにタランチのほうでは第13号(1871. 7. 17)を最初として相当量の記事があるが、カシュガル人のように「クルジャ人」や「クルジャの人々」のような表現はなく一様に「タランチ」である。クルジャ（現在の伊寧市）とはイリ地方の経済的な中心地で、清朝に返還されるまでロシア軍が駐留し、その後もロシアの領事館や銀行、郵便局などの施設が置かれた町である。当時、一般にタランチが「タランチ」を自称していたか否かは不明であるが、少なくともロシア側では彼

<sup>5</sup> 羽田明『中央アジア史研究』臨川書店、1982年、253頁。

<sup>6</sup> 佐口透『新疆民族史研究』吉川弘文館、1986年、253-291頁。

<sup>7</sup> 濱田正美「ムッラー・ピラールの『聖戦記』について」『東洋学報』55巻4号、1973年、31-59頁。

<sup>8</sup> “Khitāy khaberi,” *TV*, no. 4(1871.3.15); “Her nevē khaberler,” *TV*, no. 8(1878.4.29).

らをタランチと認識し、カシュガル人とは明確に区別していたのである。

『トルキスタン地方新聞』は総督府の官報という性格上、タランチやカシュガル人が読むことはほとんど無かったと思われる。その後、ロシア・ムスリム自身の手になる定期刊行物がバクーやチフリスで出版される<sup>9</sup>が、彼らに関してより多くの情報を提供している<sup>10</sup>のは1883年4月にクリミアのバフチサライで創刊された新聞『テルジュマン』であった。創刊者であり編集・執筆にもあたったクリミア・タタールのガスプリンスキー *Ismā‘īl bey Ğasprinski* は、「新方式」 *uṣūl-i jadīd* と呼ばれる教育を中心とした改革運動を提唱、推進するとともに、「テュルク人」意識の発揚に努め、19世紀末から彼が亡くなる1914年までロシア・ムスリムの言論界ならびに政治運動をリードした<sup>11</sup>。『テルジュマン』はヨーロッパ・ロシアだけでなく、中央アジアやオスマン帝国、さらにはイランや東トルキスタンにも読者を獲得していた。『テルジュマン』の創刊号(1883.4.14)には、短いながら、以下の記事がみられる。

『トルキスタン新聞』の話によれば、ヒタイ[中国]に返還されたクルジャの地からイスラームたち(タランチーダウンガン、そしてクルグズ)がロシア側に移住したということである。

『トルキスタン新聞』とは前述の『トルキスタン地方新聞』のことであろう。イスラームとは、ここでは宗教としてのイスラームではなく、イスラームの民 *ahl-i Islām*、要するにムスリムの意味で使われているが、『テルジュマン』のなかではこのような表現がしばしばなされている。ダウンガンは漢語を母語とするムスリムのことで現在中国では回族と呼ばれている。「タランチーダウンガン」と両者をハイフンでつないでいる点は、両者の関係がどのように認識されていたのかに疑問が残るが、いずれにせよ創刊号にタランチの情報が掲載されていること自体、ガスプリンスキーの関心の高さを表しているようで興味深い。

同紙には、ガスプリンスキー自身が執筆したと思われる「カシュガルの状況」と題された記事がある<sup>12</sup>。ここではカシュガル人にたいして、「カシュガルのムスリムたち」 *Kāshghar musulmanlari*、「カシュガル人(たち)」 *Kāshgharī(lar)*、「カシュガル住民」 *K. ahālisi* などとともに「カシュガルのテュルクたち」 *K. Türkleri* の語が用いられている。テュルク語定期刊行物のなかでカシュガル人を「テュルク」と呼んだ、恐らくは最初であろう。この記事には「クルジャとカシュガルのテュルクたち」 *Ghulcha ile K. Türkleri* という表現もあり、タランチについても「テュルク」と称し、この両者をあわせて「東テュルク」 *Sharq Türkleri* と呼んでいる。また、次のような文章も含ま

<sup>9</sup> Alexandre Bennigsen et Chantal Lemerrier-Quelquejay, *La Presse et le Mouvement National : Chez les Musulmans de Russie avant 1920*, Paris, 1964, pp. 25-31.

<sup>10</sup> 1883年から1906年までの『テルジュマン』には、東トルキスタンに関する記事が40編ほどある。また、1893年4月から翌年にかけて不定期ながら、「アルスラーン・クズ」という小説が連載された。これは18世紀なかばに東トルキスタンのウチ・トゥルファンで起こった反乱を題材にした物語である。

<sup>11</sup> Lazzarini, E. J., "Ismail Bey Gasprinski's *Perevodchik/Tercüman*: A Clarion of Modernism," Hasan B. Paksoy, ed., *Central Asian Monuments*, Istanbul, 1992, pp. 143-156.

<sup>12</sup> "Ahvāl-i Kāshghar," *T. no. 2*(1895.1.13). 資料1にその全訳を示す。

れている。

彼ら[カシュガル人]が300年来被ってきたことを、どんな民族も被ったことはない。8度、10度と大きな[カシュガルの]ハーン国の住民は[中国人から]殴打を被った。しかし、またテュルクやウズベクの勇敢さを消さずに機会を待っていたことがわかる。

テュルクとウズベクの関係が「テュルク コ ウズベク」であることに異論はないであろうが、それではカシュガル人はこれらの中でどのように位置付けられているのか。「ウズベク=カシュガル人」または「ウズベク コ カシュガル人」なのか、それとも両者は並列の関係にあり、この文章は「テュルクやウズベクのような勇敢さ」という意味にとるべきなのか。『テルジュマン』ではこの箇所以外にカシュガル人とウズベクが同時には出てこないために判然とはしない。

カシュガル人を含む東トルキスタン南部のテュルク系ムスリム定住民をウズベクと呼ぶことは、他の定期刊行物にも例がなくはない。1915年にオレンブルグの新聞『ワクト』に掲載された「シナ・トルキスタンの経済的諸事」という記事は、冒頭「話の初めに次のことを言っておかねばならない。シナ・トルキスタンの人々は概ねムスリムのウズベクからなっている」<sup>13</sup>と述べる。シナ・トルキスタンは東トルキスタンと同義とみなしてよい。この記事の著者ヌシルヴァン・ヤウシェフは、ウファ出身のタタール人で、1910年代初頭から1917年までロシア領と中国領のトルキスタンを周遊しながら『ワクト』や、それと同じ出版社から刊行されていた雑誌『シューラー』などに多くの論説や紀行文を寄せた。彼は東トルキスタンを訪れる以前に滞在していたサマルカンドで、改革派ウラマーとして知られるベフブーディー-Maḥmūd Khvāja Behbūdiと会見している<sup>14</sup>。ベフブーディーは、当時トルキスタンのムスリム定住民にたいしてロシア人やタタール人が用いていた「サルト」という呼称を侮蔑的であると、これに代えて「トルキスタン人」や「ウズベク」を名乗ることを提唱した<sup>15</sup>。ヤウシェフも、恐らくはベフブーディーの主張を受け入れ、東トルキスタンのムスリム定住民にまで「ウズベク」を拡大解釈したのであろう。

ヤウシェフがこのような使い方をしたのには、当時東トルキスタンのムスリム定住民をも「サルト」と呼ぶことがあったからである。この記事の前年に同じ『ワクト』紙に掲載された「中国のウルムチ市」という記事には、「この町の5万人ほどの人々の多くは漢人やドゥンガンや、トゥルファン人とカシュガル人のサルトであり、彼らの他にはロシア・ムスリム（タタール、サルト、カザフ）も多くいる」<sup>16</sup>とある。ちなみにこの記事の著者ブルハン・シャヒドはカザン出身のタタール人であるが、1949年に新疆省主席となった後、自らをウイグルと名乗るようになる。彼は

<sup>13</sup> Nūshīrvān Yaushēf, “Türkistān-i Chīnīde iqtisādī ishler,” V, no.1795 (1915.6.12).

<sup>14</sup> 大石真一郎「ヌシルヴァン・ヤウシェフのトルキスタン周遊について」『神戸大学史学年報』第13号、1998年、20-36頁。

<sup>15</sup> 小松久男「ソ連邦の解体と中央アジア —トルキスタンをめぐって—」『地域のイメージ』（地域の世界史2）山川出版社、1998年、375頁。

<sup>16</sup> Burhān Shāhid, “Qitāyda Ürümchi shahri,” V, no.1440 (1914.3.15).

この記事を含めて、『ワクト』紙に11編の記事を掲載しているが、そのうち5編で「サルト」を用いている<sup>17</sup>。ヤウシェフは、サルトに代えてウズベクを用いるべきというベフブーディーの意見に忠実に従っただけともいえよう。

ただ、ヤウシェフ自身も東トルキスタンの住民をウズベクと呼ぶには躊躇があったのか、その後の記事にはこのような表現はほとんど出てこない。多くの場合はオアシス名に由来する名称(カシュガル人、アクス人、ホタン人等)や「ムスリム」を用いている。自ら東トルキスタンを周遊し、直接その住民と交流するなかで結局は住民が自称する呼び方に落ち着いたというところか。ヤウシェフは1917年4月にカシュガルを発ってロシア領トルキスタンに戻るが、この頃の『シューラー』誌に「アルトゥシャフル・テュルクたちの生活について」という、彼の旅行中の見聞を総轄したような論説を載せている<sup>18</sup>。「アルトゥシャフル」*Altı Shahr*とは東トルキスタン南部のオアシス諸都市の総称であり、彼自身はこれに含まれる領域に暮らすムスリム住民に某かの「一様性」を見い出していたのであろう<sup>19</sup>。

### 3. 「ウイグルの子」

以上のようにロシア・ムスリムの代表的な定期刊行物で東トルキスタンに関する記事が掲載されたが、その中で、ナザル・ホジャという、これまでの呼び方で言えばタランチにあたる投稿者は、1911年以降『シューラー』に18編(複数号に分けて掲載されたものは合わせて1編とする)、『ワクト』紙に2編の記事を寄せている(表1参照)。彼は当初、本名の*Nazar khvāja ‘Abd al-Ṣamad*を署名に使っていたが、1914年半頃から、「ウイグルの子」*Uyghur Balası*を併せて使うようになる。すなわち、自身の祖先がウイグルであるという認識(現在のウイグル人は当然その認識を持っているが)をこの頃すでに有していたことが、署名からだけでも窺うことができるのである。以下、「ウイグルの子」を名乗るにいたる経緯を彼の記事からたどってみよう([ ]には『シューラー』の巻・号数と露暦による発行日を示す)。

ナザル・ホジャの経歴は詳らかではない。彼が書いていることから確実に知りうるのは、セミレチエ州ジャルケント郡のガルジャト村に暮らしていたということだけである。記事の中に「我々のクルジャ」[7-15/1914.8.1]というような表現もあり、恐らくは1880年代初頭にクルジャから移住した者か、またはその子供であろう。また、1913年に父アブドゥルサマドと、二人の息子(上は4歳)を亡くしたという[7-8/1914.4.15]。

<sup>17</sup> 大石真一郎『『ワクト』紙上のブルハン・シャヒドの記事について』『西南アジア研究』第49号、1998年、68-84頁。

<sup>18</sup> *Nūshīrvān Yaushēf*, “*Altı Shahr Türkleri hayatından*,” *Sh*, vol.10, no.15 (1917.8.1), 16 (1917.8.15), 17 (1917.9.1).

<sup>19</sup> しかしながら、アルトゥシャフルという地域名称は「カシュガル人」にとって、自らを「アクス人」や「ホタン人」のような他のオアシス住民と結び付ける靱帯となっていたわけでは必ずしもない。また、彼らがテュルクを自称することもほとんどなかったものと思われる。

ナザル・ホジャは当時のテュルク語刊行物の多くに通じていた。ガルジャトの住民のなかでは『テルジュマン』、『ワクト』、『シューラー』に加えて、カザンで出版されていた『ユルドゥズ』 *Yıldız* やイスタンブルの『テュルク・ユルドゥ』 *Türk Yurdu* までが読まれていた[8-10/1915.5.15] といひ、彼自身も読者の一人であったことは確実であろう。

これらの定期刊行物によって当時ロシア・ムスリムの多くの知識人たちの心を捉えていたテュルク主義にナザル・ホジャも傾倒していた。1911年に『シューラー』に掲載された文章では自身をタランチと称するとともに、「我々テュルクたち」とも述べている。一方、「カシュガル人」を含む東トルキスタンのムスリムには「サルト」を用いている[4-20/1911.10.15]。「サルト」に関する議論はあったものの、この頃は依然として多くのタタール人はこの呼称を用いていたから、彼もそれにならったのであろう。

また、当時のタランチについて興味深い情報を伝えている。タランチがカシュガル地方（彼はアルトゥシャフルとほぼ重なる範囲をこう呼んでいる）にある町や村の全てからクルジャ（イリ）地方に移住させられたのがタランチの起源であることを踏まえて、「タランチ・テュルクは現在も前述の出身の町に関連してカシュガル人、ドラン人、アクス人、ホタン人、トゥルフアン人と呼ばれるが、これはタランチたちの父から子まで知られ、明らかなことである」[5-6/1912.3.15] といひ。「タランチ」が自称として定着していたか否か明らかでないといひ先に述べたが、これとは別に出身オアシスによる従来の呼び方がセミレチエに移住したタランチのなかにも残っていたことが知られる。

彼は自分たちの歴史を知ることに並々ならぬ執着を持っていた。「シナ・トルキスタンのサルトの民族史に関する一希望」[4-20/1911.10.15]と題する投稿文は次のように始まる。

民族の歴史を知ること、誰もが自分の祖先を識ること、家系や兄弟を、また彼らが過去に暮らした状況、すなわち風俗・習慣、学問・教育、技術・芸術、商業ではどんなことをしていたのか、この世の生活ではどんなふうに住んでいたのか、その暮らし方は彼らを幸せに導いたのか、それとも災いにか？誰と友で、誰と敵であったのかを学び知り、それを戒めや経験とすること、換言すれば、過去に存在したあらゆる祖先をよく見、愛する人々を、本当は自分が何者であるのかを、熟知するよう願うために知ることは絶対に正しいことである。

そして、「私たちの本来の目的は民族の歴史、すなわちシナ・トルキスタンのサルトの歴史を知ることである」といひ。シナ・トルキスタンの「サルト」の歴史が、自分たちタランチの歴史の一部をなしていると認識していたのである。

1913年に父と息子二人をあいついで失ったナザル・ホジャは、傷心を癒すために、翌年かねてからの希望であったアルトゥシャフルへの旅行を行った。『シューラー』に掲載された旅行記には「私たちの祖先の祖国であり文明的なウイグルの祖先たちの舞台であり、イスラーム戦士たちが前世紀に強大なテュルクのハーン国を樹立した場所であり、若干の裏切者の策略のために間もな

く滅びたアルトゥシャフル」とか、「トゥルファンとヤルカンドはウイグルの祖先たちの首都の一つとみなされていた。その頃、ウイグル・テュルクたちもその時代では文明的な民族の一つであった」[7-8/1914. 4. 15] と述べている。また、「ウイグルの子」を署名に使い始めてからの記事には「我々ウイグルの子孫」という表現も使っている[7-22/1914. 11. 15]。

当時、「ウイグル」の名称はロシアのトルコ学者たちによって使われ始めていた。1890年に『クダトゥク・ビリク』のウイーン本テキストをサンクト・ペテルブルグで刊行したラドロフは、1893年には「ウイグルについての問題に関して：『クダトゥク・ビリク』刊行の序文から」という論文を発表し、その後もトゥルファンなどで発見された古代ウイグル文献について多くの研究を残した。また、彼の弟子であり、後に「ウイグル」を民族名称として復活させることを提案したとされるマローフは、1910年の2-6月、1910年10月から翌年3月、1913年8-12月の三度にわたって中国甘粛地方に旅行し、そこに暮らすサリグ・ウイグルの言語、民俗、フォークロアの調査を行った。サリグ・ウイグルの起源は16世紀初頭に東トルキスタン東部から甘粛地方に逃れてきた仏教徒である。

ナザル・ホジャが「ウイグルの子」を名乗りはじめる1914年以前に、テュルク語定期刊行物でもこれらの研究や調査旅行に関する紹介がなされた。1913年8月の『ワクト』紙には「ウイグルを調査する」という記事が掲載された。この記事の著者ブルハン・シャヒドは、三度目の調査旅行の途中ウルムチに滞在していたマローフとの会談を記し、「この学識ある旅行者が多くの困難に遭いながらも、遙か昔にいなくなったウイグルを探し出し、彼らの足跡を見つけ、テュルク・タタールの歴史に貢献したことは、我々のためにも称賛と感謝に値する」<sup>20</sup>と述べている。また、同年11月に出た『シューラー』誌には「ウイグル語について」という論説があり、それには「テュルク文学はウイグル（ユグル、ウグル、漢語でホイフ）方言で始められた。オルホン碑文はより以前に書かれたが、真の意味で言うと、テュルク文学はウイグル語で始められた」<sup>21</sup>とある。

これらの記事で使われた「ウイグル」はタランチやカシュガル人のことを差すものではなかったが、自分たちの歴史や出自を探し求めるナザル・ホジャの目に、「ウイグル」の情報は魅力的に映ったにちがいない。「ウイグルの子」を自認したナザル・ホジャは、現在の自分たちの呼称についても問題を提起する。

昔の時代に「ウイグル」と呼ばれ、現在名無しとなった東トルキスタンのテュルクの生活風景はとて哀れで気の毒なものである。(中略)上で「東トルキスタンのテュルクは初めウイグルと呼ばれて、今や名無しとなった」と私は言った。何故か。土着のテュルクである以外に、あなたは何者かと問えば、私はカシュガル人だとか、コーカンド人だと言う。「それは土地の名前だろ！」と言えば、すぐに「私はムスリムだ」という。否、私はあなたの宗教を尋ねているのではないと言うと、

<sup>20</sup> Burhān Shahīd, "Uyghurlarni izlen," V, no.1260 (1913.7.27).

<sup>21</sup> Mīr Sayyāf, "Uyghur tili toghrisinde," Sh, vol.6, no. 22 (1913.11.15).

恥ずかしそうに「私はチャントゥです」と答える。カザフやクルグズに混じって暮らしている者たちは「私はサルトです」と言う。要するに、彼らは自分たちが何者であるのかも知らないのである。なんと無知なことか！ [8-19/1915. 10. 1]

ここでいう「あなた」とは「東トルキスタンのテュルク」のことであるが、前述したように、彼らの歴史がタランチの歴史の一部をなすことを認識する以上、それはナザル・ホジャ自身への呼び掛けともとれる。彼は、テュルクであるという認識だけでは満足せず、さらにテュルク諸族のなかの何であるのかを自問する。彼が求めているのは、「タタール」や「カザフ」と同じレベルの名称だったのであろう。清朝の東トルキスタン征服以降、テュルク系ムスリム定住民にたいして「ターバンで頭を纏ったムスリム」の謂いで用いられた「纏頭（回）」すなわち「チャントゥ」は、「サルト」と同様、彼らにとっては他称にすぎず、しかも呼ばれる側からは侮蔑的なひびきを感じるものであったから、これらを名乗ることは受け入れがたいものであった。ナザル・ホジャは、この記事において言外に「ウイグル」を想定していたものと思われる。が、その後1917年までの記事を見る限り、自身を「ウイグルの子」や「ウイグルの子孫」と呼ぶにとどまり、「ウイグル」であると言うまでにはいたらなかった。

しかしながら、1921年にアルマアタで決定された民族名称「ウイグル」の採用が、ほど遠からぬジャルケントに住むナザル・ホジャのそれまでの文筆活動と全く関係なく行われたとはむしろ考えにくい。であるならば、ロシア人の発議による決定であっても、幾許かは「ウイグル」と呼ばれるようになる側にも主体性があつたのではないかと思われる。

#### 4. 「ウイグル」の定着と『貧者の声』

それまで独自の刊行物を持たなかったロシア側のタランチやカシュガル人の間では、ロシア10月革命以降、そして1921年にウイグルの民族名称が復活して以降さらに、盛んな出版活動が始められる。

そのなかで、「ウイグルの子」ことナザル・ホジャもまた、1921年にクルジャで『オマクとアムラク』*Omaq bilen Amraq*、翌年にはアルマアタで『ナズクム』*Nozu Kum* と『タランチ・テュルクの歴史』*Taranchi Türklirining Tārikhi* という著書を発表している。いずれも報告者は未見であるが、最後のものは、タランチのアルトウシャフルからイリ地方への移住、奴隷時代、タランチの王国、セミレチエへの移住に関して叙述されているという。

定期刊行物では、1918年にタランチとダウンガンの合同ソヴィエトから石版刷りで『タランチの声』*Ṣadā-yi Taranchi* が出版されるが、残念ながらこれは数号のみで廃刊となった。当初、タシュケントのウイグル人学生たちによって文芸雑誌として手書きで配付されていた『青年ウイグル』*Yash Uyghur* は、全ロシア青年コムニスト中央アジア・ビューローの発行となり1922-23年頃に

は日刊新聞として2,500部を出版した。また、クルグズスタン自治州ピシュペクでウイグル人労働者主導により新聞『解放』*Qutulush*が発行されたという。

新聞『貧者の声』*Kembegeller Awazi*もそのような刊行物の一つであった。創刊号はカシュガル人、タランチ、ドゥンガン等の東トルキスタン出身者がタシュケントにおいて一堂に会した大会に先立って、1921年6月1日にタシュケントにおいて石版刷りで発行された。第2号は、報告者が調査した、この新聞が所蔵されているアルマアタのカザフスタン科学アカデミー中央図書館とカザフスタン国立図書館のいずれでも欠落している。その後の第3号(1922.2.6)からは「トルキスタン共産党イェッテス(セミレチエ)地方委員会宣伝部ウイグル・コムニスト課とウイグル・コムニスト青年地方ビューロー」の発行でアルマアタにおいて活版印刷で出されている。組織改編等によって発行元の名称が幾度か変わるが、1932年までの間に450号ほどが出版された。

『貧者の声』は当初、「カシュガル—タランチ語」の新聞として創刊された。第3号では「タランチ語の週刊新聞」という表書きがなされるが、第8号(1922.8.17)で再び「カシュガル—タランチ語の週刊新聞」となっている。すなわち、「ウイグル」の民族名称が公式に採用された後も、依然として従来の呼称が使われていたのである。まだ内容にまで十分に目を通していないが、見出しに限っていえば、「ウイグル」の名称が初めて現れるは第4号(1922.2.13)の「革命家ウイグル青年について」という記事であり、これを書いたのも「ウイグルの子」であった。ちなみに31号(1925.2.10)までに「ウイグルの子」の署名があるものは7編である。彼自身がこの新聞の編集に携っていた形跡はなく、あくまで投稿者として執筆活動を続けていたようである。

ナザル・ホジャにとって、「ウイグル」を使うことに躊躇はなかったであろう。しかし、当時はまだ多くの人々にとって某かの違和感を伴うものであったと思われる。他の執筆者のなかには、「タランチ」や「テュルク」を使い続ける者や、「ウイグル」を使うにしても、わざわざ括弧をつけて記す者もいた。『貧者の声』の表書きに「ウイグル語の週刊新聞」とようやく明記されるようになるのは、第52号(1925.7.10)からであった。

勿論、この時期をもって「ウイグル」の民族名称が人々のあいだで定着したと断言することはできない。定着の過程を論ずるには、『貧者の声』その他の文献を十分に吟味しなければならないからである。しかしながら、これらの出版物を通じて自分たちが「ウイグル」であることを「知らされる」人々は、しだいにその数を増やしたであろうことは想像に難くない。

#### <史料略号>

Sh: *Shūrā, Orenburg*, 1908-1918.

T: *Terjümān, Baghchesaray*, 1883-1917.

TV: *Türkistān Vilāyetining Gazetesi*, Tashkend, 1871-1917.

V: *Vaqit, Orenburg*, 1906-1917.

## 資料1 「カシュガルの状況」 『テルジュマン』 13-2/1895. 1. 13

カシュガルのテュルクたちが独立宣言して、彼らが属するシナが日本の足蹴の下にある間に、祈願を新たに成就し、以前のようにハン国を樹立しようとしていることがイギリスの新聞に見られた。

故アターク・ガズィー・ヤークーブ・ハーンの家系の一人をハーンに掲げ、このためにロシア国の支援と保護を要請することに決めたい。

身体にはシナの拘束具、背中にはシナの笞というような、二つの恐怖の道具によって苦しめられている哀れなカシュガルのテュルクたちは、山のこちら側のコーカンド、フェルガナ地方でロシアの統治下にある同族たちの平和な状況を見て、彼らの目も心もこちら側に向けられていることが知られている。しかし、我々は彼らにある種の慰めを与える術や方法を見つけることはできない。

25年か30年毎に一度、カシュガルのムスリムは独立宣言をしては延々と戦争をしてきたのである。ハーンの政権はシナの支配よりも何倍も良く、公正であっても、ハーンたちやベクたちは国や政治の事柄について知らず、ただのマンラーほどの者にも完全な人がいないために、きちんとした規律や統治がなく、ムスリム住民たちの生命と熱意の犠牲が活用されたことはない。ハーンたちの手のなかでは、住民の熱意にたいする報いやその生命のための安寧や安全を見ることはできなかつたのである。

カシュガルの歴史を知る者にはまったく明らかなことであるが、幾度もシナ人を打負かし、カシュガル地方から追い出して、住民は民族の政権を樹立した。しかし、何の益があるのか、「ハーキム」となったマンラーやその親類たちは蓄財に熱意を燃やし、シナ人たちが再び来るといふ知らせがあるやいなや集めた全ての金品を家畜に担がせて、山のこちら側、即ちフェルガナに逃げたものであった。侵略してくるシナ人は住民を虐殺しつつ復讐を遂げた。このようなことは八度十度とあったことが知られている。

政権の樹立や独立の保持、すなわち自らの指導者のために整然とした形で統治されるのに必要なものがカシュガルにはない。武器はなく、知識や教養がなく、首長となるべき人がいない。政権とはどんなものであるのかを知っているのか？テッケの人々は一人の「ホジャ」をハーキムとし、馬や羊の泥棒である「英雄」を某かの長官と見なしているために、今日でも政権を樹立できないでいる。カシュガルのハーキムのなかで故アターク・ガズィーだけは別である。他のどのカシュガルのハーキムたちとも比べ物にならない。熱意の人であり、情熱の人であり真の英雄であった。が、その息子たちは父に似た某かの証も見られない。

アターク・ガズィー・ヤークーブ・ベク（すなわちハーン）はこの世に傑出した人物の一人であった。彼のお陰で樹立された「カシュガル・ハーン国」は大いに発展した。彼は新しく整然とした統治を行っていた。しかし、何の益があつてか、ヤークーブ・ハーンのために祈祷や感謝しなければならないはずの卑しい凶悪な手は、彼の殺害のために使われた。我々がタシュケントへ旅行した際、信用できる人物から得た情報によれば、アターク・ガズィーは近しい者の手で犠牲になったという。息子たちに残された政権は分裂と腐敗の原因となって存続できなかつた。後にやって来たシナ人たちは彼らが逃げるのを余儀無くさせ、哀れな住民を言葉で讃えずに、面倒や苦勞に見舞わせた。も

しも、カシュガル人たちが独立宣言したことが本当であっても、我々はヤークーブ・ハーンの子供たちによって事がよくなったとは考えない。至高なる神は別の方から援助をなされるとしても、私は知らない。

ロシア政府は平和と安寧を愛するものであり、カシュガル支配を考えたり、隣国内にある混乱にスカートの下から援助しようとはしないことは明らかであるが、我々はカシュガル人の同族者たちにたいする自然な愛情のために、彼らがいつかシナの横暴から解放され、ロシアの統治や文明的な方法のお陰で安寧を獲得することを神に願っている。カシュガルのムスリムたちの状況に耳を貸すことも人道上の義務である。彼らが300年来被ってきたことを、どんな民族も被ったことはない。8度、10度と大きなハーン国の住民たちは殴打を受けた。しかし、またテュルクやウズベクの勇敢さを消さずに機会を待っていたことが分かる。しかし、指導者となる人物はいないのである。

今から何週間か前に故ヤークーブ・ハーン支持者の一人でカシュガル人のハジ・ユースフ・エフェンディがヒジャーズへの途中でバフチサライに來た。彼から聞いた詳細は悲しむべきものであった。カシュガル住民は一方ではシナの役人たちの手によって略奪された後に、もう一度自分たちのカーディーやベクたちによって略奪されているらしい。このような者たちを信用して大国シナに対して反乱することは、将来いつか再びシナ人の虐殺に遭遇することを買うことである。日本と戦った後、シナ人たちは哀れなカシュガルに襲いかかっている。止まれ、言うべきことはあるのか？援助すべきは誰か？そのため、我々はイギリスの新聞が与えた情報を喜ばなかった。

今から14年前に我々が出版した冊子で中央アジアにすむ全てのテュルク人がロシアの支配に入ることが自然の事であることを書いた。事実、それ以来アハル・テケのテュルクメン人やメルブのテュルク人やパミールの一部はロシアの支配に入り、グルジャやカシュガルのテュルクたちがロシアの方に願いを寄せていることは、我々の考えが無根拠なものではなかったことの証である。

今回、カシュガルから話を始めたのは、我らの高貴なる政府が介入するよう説得・奨励するものではなく、ただ東テュルクの心情や希望にたいしてロシア人学者の注意を引くことを望んでいるだけである。彼らのロシアにたいする心情や愛情は自然なものである。ロシアの支配にある同族者たちを平和であり、さらに発展していると見ているのだ。

## 表1 ナザル・ホジャの定期刊行物掲載記事タイトルと署名

『シューラー』	
4-13/1911.7.1/s.408.	ガルジャト Nazar khvāja ‘Abd al-Şamad
4-8/ 1911.9.15/ ss.561-3.	クルジャ王国について Ghālĵātġi: N. ‘Abd al-Şamad, Tarānji
4-20/ 1911.10.15/ ss.617-8.	シナ・トルキスタンのサルトの民族史に関する一希望 Ghālĵāt qariyesinde: Nazar khvāja ‘Abd al-Şamad oghlŌ
5-6/ 1912.3.15/ s.177.	タランチ Nazar khvāja <Ghālĵāt>

- 5-13/ 1912.7.1/ ss.393-5. シナ・トルキスタンのテュルク N. 'A. Toghru <Yärkend>  
 5-14/ 1912.7.15/ ss.423-6. シナ・トルキスタンのテュルク N. 'A. Toghru <Yärkend>  
 6-11/ 1913.6.1/ ss.332-3. カシュガル・テュルクのイスラーム受容と古書  
 Nazar khvāja 'Abd al-Şamad oghli  
 6-12/ 1913.6.15/ ss.364-5. [誌上討論] テュルク諸族のための共通語  
 Nazar khvāja 'Abd al-Şamad oghli. Ghālĵāt qariyesinde  
 7-1/ 1914.1.1/ s.23. ガルジャト Nazar khvāja 'Abd al-Şamad  
 7-8/ 1914.4.15/ ss.233-7. 旅行記 (アルトウシャフル周遊)  
 Nazar khvāja 'Abd al-Şamad oghli <Ghulĵa>  
 7-10/ 1914.5.15/ s.312. ガルジャト Nazar khvāja 'Abd al-Şamad oghli  
 7-14/ 1914.7.15/ ss.425-7. タランチ・テュルク I  
 7-15/ 1914.8.1/ ss.455-7. タランチ・テュルク II Uyghur Balasī, N. 'A  
 7-22/ 1914.11.15/ s.699. ガルジャト Türkistānlī: Uyghur Balasī  
 7-23/ 1914.12.1/ s.715. 拜火教徒の飢餓から守る方法 Toghru <Yärkend>  
 8-3/ 1915.2.1/ ss.72-5. イリ地方の歴史 (民族史について) Nazar khvāja 'Abd al-Şamad oghli  
 8-10/ 1915.5.15/ ss.293-6. タランチ・テュルクはどのように暮らしているか? Uyghur Balasī  
 8-19/ 1915.10.1/ ss.585-6. 私たちの生活 Nazar khvāja <Ghālĵāt>  
 8-23/ 1915.12.1/ ss.709-11. タランチ・テュルクはどのように暮らしているか? Uyghur Balasī  
 10-11/ 1917.6.1/ ss.255-9. タランチ・テュルクの婦女子 N. 'Abd al-Şamad oghli

『ワクト』

- 1492/ 1914.5.23 クルジャのタタール Uyghur Balasī  
 1592/ 1914.9.24 戦争とクルジャのムスリム Uyghur

『貧者の声』

- 4/1922.2.13 革命家ウイグル青年たちについて Uyghur Balasī  
 5/ 1922.2.20 ウイグル・コムニスト青年：彼らの立場と意義 Uyghur  
 5/ 1922.2.20 生活のために！ Uyghur Balasī  
 16/ 1923.12.1 [文化と教育] 何よりもまず小学校が必要だ！ Uyghur Balasī  
 18/ 1924.9.14 [文学] 純粋な楽しみ Uyghur Balasī  
 24/ 1924.11.18 [文学] (無題) Uyghur Balasī  
 25/ 1924.11.30 批判への返答 Uyghur Balasī  
 25/ 1924.11.30 [文学] (不明) Uyghur Balasī  
 31/ 1925.2.10 [文学] 希望 Uyghur Balasī